島根大学教育学部附属学校園の幼小中一貫教育の現状とめざすもの

本学校園が本格的に幼小中一貫教育に力を注ぎはじめたのは法人化に向けての準備をはじめた平成15年からのことであった。その背景には，全国の国立大学における教育・研究の計画的な運営の必要性，特徴性，およびコスト意識が社会的に要求されてきたことがあげられる。また，本学校園の位置する島根県松江市は，県庁所在地であると同時に自然も豊かであることに加え，島根大学松江キャンパスとも近いという立地条件から，地域との社会的・自然的な関わりをいかし，本学校園と大学とが教育・研究連携を積極的に進めてきた実績がある。以上のような本学校園をとりまく社会的な背景と教育的な状況の中，社会では幼小中の接続期における様々な教育課題がより問題視されるようになっていた。本学校園においても，どのような子どもを育てるかを考えた時に，幼小中の11年間の学びの中で連続した教育を行うことが重要であるという認識に至った。つまり幼小中一貫教育をとおして附属学校園としての育てたい子どもの姿が明確になってきたのである。ここでは，筆者なりの認識として本学校園の幼小中一貫教育の現状とめざすものについて，最近の本学校園での取り組みや議論をふまえて述べてみたい。

まず，本学校園がめざす幼小中一貫教育をとおして育てたい子どもの姿についてであるが，平成18年に基本的な方向性を報告書『島根大学教育学部附属学校園一貫教育のあり方について（平成18年９月島根大学教育学部改組計画ＷＧ）』として明確化した。そこで，今につながる基本理念として「幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって，次代を創造していく優れた人材を育成する」が示された。この基本理念でいう「次代を創造していく優れた人材」とは，「子どもたちの一人ひとりが，自ら考え行動していくことのできる自立した個人として，心豊かにたくましく生き抜いていく」という願いや姿を込めている。そのために，幼稚園，小学校，中学校がともに力を合わせて一体となった教育を行うことを宣言したものであり，学部や家庭との連携を重要視しているのである。もう少し具体的に育てたい子どもの姿をみてみたい。昨年までの本学校園の研究紀要にも繰り返し示されてきたものではあるが，これまでの，またこれからの教育・研究活動をとらえる際に重要であることから以下に示した。

・新しい時代を切り拓き，社会に貢献しようとする子ども
・豊かな感性を育み，創造的に探究し続ける子ども
・人とのかかわりを大切にし，共に伸びていく子ども

以上の３つの子どもの姿は，地域の中で貢献・活躍する人材の育成を，豊かな学力と人間性を獲得することにより実現していこうというメッセージを子どもたち自身に，私たち教員に，地域社会に向けて発したものである。このようにとらえると本学校園の一貫教育をとおして行っている様々な取り組みや教育研究が理解しやすくなる。

さて，これまでの本学校園の一貫教育における現状であるが，一貫教育の完成期としてめざしている平成25年度を見据えると，今年度は４年次にあたり，その効果や成果をある程度具現化する大切な時期にきているといえる。研究主題の「豊かな『社会生活』を創造する幼小中一貫教育の追究」には副題（１）として「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」を示している。また，その副題には年次ごとの「子どもの学び」の研究段階に応じたメッセージを副題（２）として設定した。副題（２）は，初年度の「子どもの学びをとらえる」から，「子どもの学びをつなぐ」，「子どもの学びをつむぐ」と研究を進め，今年度の「子どもの学びを開く」という段階に達している。これをさらに最終研究段階の副題（２）「学びを拓く子どもの姿を求めて」につなげることをめざしている。私たちは，これら副題の一部に設定した「子どもの学び」を学校生活の全ての活動において意識するとともに，幼小中の特に接続期前後に注目し教育研究を進めてきた。また，幼小中に加えて学部の教員が加わり，一貫教育で育てる「子どもの姿」の実現のために，確かな学力と社会力の育成をどのような内容や方法により行うべきかの協議を重ねている。この協議をとおして，研究年次が進むにつれ幼小中に加え学部のそれぞれの連携が密になってきたことを実感している。それに伴い議論が深まり，保育・教科での「子どもの学び」について

の保育・教科でのとらえ方や「学び」の進め方について，成果や課題の一部が見え始めている段階にある。今年度の本紀要や本研究発表協議会において是非，注目して頂きたいところである（本紀要の教育研究の構想の項も参照）。

また本学校園では「子どもの学び」の中の，思考力・判断力・表現力を重視し11年の一貫教育の中で３つの教育研究ブロックを設定し，それぞれのブロックの中，つまり子どもの発達段階のブロック化の中で育てたい力をさらに絞り込んで研究を進めている。３つの教育研究ブロックは初等部前期（年少・年長・小１・小２），初等部後期（小３・小４・小５），中等部（小６・中１・中２・中３）を設定している。なぜ，この４・３・４の教育研究ブロックになるかについては様々な見方や意見もあると考える。確かに教育政策上・財務上の観点からもこの４・３・４の教育研究ブロックを評価することも必要であるが，ここまで述べてきた「子どもの学び」という観点からこのブロックをとらえることが重要であり，研究を進める中で，本学校園が進める４・３・４の教育研究ブロックの強みが明確になってきた。

つまり，これまでの本学校園での議論をもとに解説すると，社会的に問題視されている幼小や小中間での，いわゆる接続期に生じる子どもの学力や社会力に対する対応の難しさ（小１プロブレムや中１ギャップ）に対応すべく，本学校園ではその接続期を１つの教育研究ブロックの中にまとめるところから一貫教育をはじめた。また９歳や10歳という学力の定着や思春期を迎える小３，小４，小５という比較的難しい年代であるとされる学年を１つのブロックとしてまとめ，ギャップを少なくするように努めていることも，本学校園の進める４・３・４の教育研究ブロックの強みといえることも研究を進める中で明らかになってきた成果の一つであるといえる。

それぞれの保育・教科におけるこれまでの一貫教育における現状はどうであろうか。これは先に述べた「子どもの学び」の中での，思考力・判断力・表現力という形でそれぞれの保育・教科でその成果がまとまりつつある。それを教育研究ブロックごとに整理することにより，子どもの11年間の連続した学びの姿が明確になると期待している。特に，注視している「思考力・判断力・表現力」を子どもの学び合う姿の中から見いだそうと研究を重ね，一貫教育の完成期である平成25年度をめざしているところである。この間，子ども同士がお互いにかかわり合う中で，どのような場面で「学び」が生まれるのか，また，どのように教師のはたらきかけがあると効果的に「学び」が深化していくのかなどの一端が明らかとなってきた。子どもの「個」としての気づき，疑問，驚き，喜びなどが，集団の中のかかわりをとおして，修正もしくは発展し，それがまた「個」に戻っていくことにより，子どもの「思考力・判断力・表現力」が育成され，『子どもの豊かな学び』へと繋がることをめざすことが必要であるといえる。そして，研究主題である「豊かな『社会生活』を創造する幼小中一貫教育の追究」を，本研究期間だけではなく，本学校園の教育研究基盤の一つとして，PDCAサイクルのもと評価を明確にし，継続的に進めていくことが重要であると考える。

（附属学校主事：島根大学教育学部初等教育開発講座　松本　一郎）